



キャンパス点描
— 通信教育部市ヶ谷キャンパス



第13号

2020年
6月25日発行

日本大学国文学会

同窓会誌



通信教育部は通信制大学として長い歴史を誇り、文学部国文学科と連携する文学専攻の一つとして「国文学」が設けられている。カリキュラムは通学課程と若干の相違があるが、各種スクーリングや卒業論文など、教育・指導を担当する教員は共通である。六年前にメインキャンパスが水道橋から市ヶ谷へ移転した。写真は本年三月の校舎とその周辺の様子で、いかにも都会のキャンパスらしいたたずまいである。



OB・OGだより

卒業してから早9年

藤生 希代子

先日、阿部好臣先生の最終講義を受講した。見慣れた教室で先生の声を聞いていると、学生に戻ったようで懐かしい気持ちになった。

在学中は興味のあった『源氏物語』を学ぶために、阿部先生のゼミに所属した。多くの注釈書と比較して一つ一つの言葉を調べ、『源氏物語』を読んでいくのはとても面白かった。これだけ多くの研究書がある『源氏物語』もわかっていないことは沢山あるのだと知った。

私は現在、日本大学習志野高等学校で教員をしている。生徒に古典の面白さを伝えよう、という思いで教員になった。

今まで授業をしていく中で色々と思うことがあった。古典の定番教材を何度か扱うようになり、始めの頃に比べると作品について理解しているつもりである。しかし、自分の知識を生徒に一方的に話しているの

ではないか。時間が足りないからといって、異なる捉え方をしている注釈書があっても、指導書に従ってそれだけが正解かのように教えてしまっているのではないか。悩みは尽きない。生徒にとつて何が最良なのか、その方法を模索し続けている。

卒業論文を提出した時、阿部先生には「まだまだ勉強が必要ですね」と言われた。先生は覚えていないだろうけれども、大学を卒業してすぐ教員の世界に飛び込む私を心配して掛けてくれた言葉だと思う。これからもその言葉を励みに教員を続けていきたい。

〔平成23年国文学科卒業〕

母校に帰って思うこと

加藤 圭将

大学卒業後、地元山形県に戻り、現在は母校の日本大学山形高等学校に非常勤講師として勤めている。着任当初は、私が在学していた頃の担任の先生も勤務されていて、恩師と一緒に仕事をしているのかと思うと、なんともむず痒い感覚を味わったことを今でも覚えている。

当時は、このまま教師を続けていけるのだろうかと不安を抱いていた。転機となったのは教員生活二年目、三年生の教科担当を持った時である。三年生は夏休みに入った頃から、推薦入試への準備が本格化する。日頃の授業の中でも、入試への不安からか、いつもと違った雰囲気が漂っていた。私は小論文指導や面接練習などで、生徒とともに大学合格を目指していたが、そうこうしているうちに「先生！ 受かったよ！」と報告にきてくれる生徒が現れた。その姿を前にして脳裏に浮かんできたのは、私が大学に合格した時の指導の先生の顔だった。あの時の先生は、ほっとした表情を見せ、目一杯喜んでくださった。あの時と今の状況を重ね合わせ、先生はこんな気持ちだったのだろうか、と思いを馳せながら、生徒とともに喜びあった。教師を続けていこう、と強く心に決めた瞬間であった。

学校生活を通じて生徒たちは変化し、たった三年で大きく成長していく。そんな姿を間近で見ることができ、また、その成長を手助けすることができる。今ではこうした期待や希望が励みとなって、少しばかり自信もつてきたように感じる。

〔平成30年国文学科卒業〕

交 差 点

定時制高校国語教員として



南 悟

教職員組合の声明に救われる

二〇一八年五月のアメフト部危険タックル問題と大学当局の不誠実な対応に、暗澹たる思いでしたが、教職員組合の「声明」文と行動には救われました。

50年前の在学中、大学の民主化を求めて組織された全共闘運動に関わった経験から、学生と教職員の意向が大切にされる学園を願うばかりです。

多くの短詩型作品に親しむ

在学中は学園封鎖が長く続きましたが、それでも著名な先生方、百人一首の吉保先生、万葉集の森淳司先生、啄木研究の岩城之徳先生、近代文学の布野栄一先生などから大きな学びがありました。多くの短詩型作品に親しんだこと、学友と競って万葉集を暗唱し合ったことも国語教員としての基礎を築けたように思えます。

国文学科の先生方の支え

学園の混乱の下、私も卒業が危ぶまれたのですが、国文学科の先生方のお力添えを得て5年で卒業することができ、その時付与された、『国語免許状』で50年近い教員生活が続けてこられ感謝しています。

また、今春退職された2学年下の阿部好臣先生とのご縁で、こうして母校に繋がることのできたことが大変嬉しいのです。

夜間定時制高校一筋33年

卒業後、郷里の兵庫県に帰り、県立高校国語教員として63歳の退職まで勤めました。が、退職までの33年間、同一校の定時制高校で勤務しました。

昼間に働き夜に学ぶ生徒の頑張りをどうにか表現してもらえないかと取り組んだのが短歌の創作でした。

命が吹き込まれた短歌の数々

指折り心に向き合う中から、数々の歌が紡ぎ出されました。

母が死に父は失踪兄と俺夜学4年目今
生きてる 19才男（一九八七年）

俺は今大工の華咲く15才足場に上がり
破風板を打つ 15才男（一九九七年）

一九九五年の阪神大震災の未曾有の体験
を詠んだ貴重な歌も残されています。

駆けつける友の住まいは崩れ落ち生き
埋めの友われは無力 20才男

崩れ落ち部屋に埋もれる友人の最後の
言葉はもう眠たいわ 19才女

生徒の短歌が著作やメディアで紹介

退職までの約30年間続けられた生徒の短歌創作活動を、岩波ブックレット『定時制高校の青春』（一九九四）、岩波ジュニア新書『生きていくための短歌』（二〇〇九）などで出版。それを受けて、NHKテレビの全国放送『卒業のうた・神戸工高 青春の短歌』（二〇〇・五 稲垣吾郎ナレーション）など7作品が放映。雑誌『世界』への寄稿を含め、全国紙の新聞報道やNHKラジオなども多数あり、映画監督の山田洋次氏が2度授業見学にいられたこともありました。

退職後の近況

63歳で退職後7年間は、関西大学非常勤講師として教職必修科目を担当して、教員を目指す学生たちに、生徒の困難や葛藤に寄り添う教員の心構えを伝えてきました。73歳の現在は、神戸の保育士養成の専門学校で学院長補佐として週に3〜4日の勤務で授業も担当しています。

<http://www.seisyun-tankka.com>（青春の短歌）

〔昭和45年国文学科卒業〕

追悼

山田肇徹先生

令和元年8月6日逝去

てるあき先生との思い出

寒河江 實

私は山田肇徹先生のことを「てるあきさん」と呼んでいました。それは国語学専攻の研究室では松尾拾教授の下いつも行動を共にしていたことと『新明解国語辞典』主幹山田忠雄先生の研究会に山田姓が三名もいた事でした。

国語学会は年二回の一回は地方大学で方言研究会・訓点語学会と共に開催されていました。学会出張の楽しい思い出の一つは古書店巡りで数軒を回れば必ず他大学の仲間と出合い夜の会合の話などが纏まったものでした。

山田忠雄先生の研究会は、渋谷の研究室と吉祥寺の自宅でした。自宅には地下書庫と卓球場があり厳しい研究会が終わると卓球の試合に移行するのが通例でした。忠雄先生も上手でしたがてるあきさんの方が上でした。試合の準備・組み合せ・時間配分・記録等の企画はてるあきさんの役目で山田卓球クラブの主将として活躍していました。試合はダブルスだったので、私とペアになると勝率が高かったように懐かしさと思い出が一人です。

てるあきさんの研究対象は『醒睡笑』で江戸の落語や咄本などに影響を与えたものであり、大学の落語研究会の顧問を長く任されて

いました。現在活躍している落語家もいるし、学生指導に当たっても笑いを絶やす事なく対処されていていました。研究者というよりも教育者としての人格であったように思われます。

当時の国文学科研究室で国語学を専攻する学生は少なく特に院生は希でしたので特殊講義は他からの講師が多く一対一の講義で非常に恵まれた環境でした。「文学の鬼」と自称されていた高木市之助先生は時々てるあきさんの部屋に泊まれ奥に墨痕鮮やかな書を物していましたし時枝文法の時枝誠記先生の講義は校外での授業が多かったようです。日大を退職後の山田忠雄先生の指導も長く最後まで続いておりました。

てるあきさん。天国で先生方と聞こし召しながら卓球を楽しんでいることでしょうか。心からご冥福をお祈りしております。

「元法学部教員」

山田肇徹先生の思い出

菊地 圭介

平成元年の四月、大学に入學して、右も左も分からない頃、七組担任として最初にお世話になったのが山田肇徹先生でした。先生はいつもこやかに御対応下さって、その一年間七組の学生達と「国語国文学」を受講したが、先生のお好きな阪神が勝った翌日は上機嫌でいらしたのが懐かしく思い出される。授業では、夏休みに『土左日記』の影印本を冒頭から末尾まで筆で書写する宿題が出された

り、橋本進吉『古代国語の音韻に就いて』を感想文課題で出して下さったり、あるいは江戸時代の国学者の文学法説についてとても楽しそうにお話を下さったりして（関連して『手爾葉大概抄』を読んだのも確か先生の授業でだったよな……）、学問の奥深さを初めて知ったのも、国語学は面白いなあと実感したのも一年次の先生の授業であった。

二年生では先生の「国文法」を受講した。今でもノートを保管してあるが、見返してみると『じ』は無活用なのになぜ助動詞か等、テキストを離れた問いかけを学生に投げかけて下さって、ことの根本を突き詰めて考えるきっかけになった。今、高校で国語科教員として生徒に古典文法を教える基礎はこの時にお教えたいただいたことが大きかったと改めて感じる。

学部四年生の夏休み、卒業論文の指導ということで、先生のご自宅にお邪魔したことがあった。たくさん本を見せていただき、予定時間を過ぎても、いろいろなお話を聞かせていただいた。

また、同じ頃だったか、先生に連れられて山田忠雄先生のご自宅に卓球をした何回かとも忘れられない。確か今野真二さんもいらして、卓球の終わつた後に、皆さんが交わっている研究や学問のお話を、ただすごいなあと圧倒されて聞いていたのもう四半世紀以上前の懐かしい思い出である。

国語科の教員の道に導いて下さったことに、心より感謝申し上げます。

〔都立立川国際中等教育学校教諭〕

談話室

かわいいなんて言わないで

阿部 好臣

結構、流行の言葉であろう。何でも、可愛ければ良いといった発想に、違和感を抱き続けているのだが、これについて多少考えてみて、今の心境を見つめてみようと思った。

まず、この言葉に一番似つかわしいと思われる言葉に「らうたし」なる語があると思う。『源氏物語』で、先ずこの語が登場するのは、若紫巻の「つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ」と、後に紫上として光源氏の最愛の人となる女子を叙するところである。彼女は故按察使大納言の娘を母として、兵部卿宮を父として出生したのだが、多分、父からは認知されず、母にも先立たれ、病身の祖母にかしづかれ、都の北方の山里で、ひっそりと隠れるように住んでいたのだっ

た。瘡病みに患い、その加持・祈祷のためにこっそり出掛けた源氏が彼女を発見した、という展開である。「顔つきがまことにいじらしく」と訳される。無論、此処では源氏は彼女の素性は知らない。だが、この子の顔つきから、にじみ出るような可憐な雰囲気、心に心魅かれるのだった。同病相哀れむの感もあったか。

「可愛」とは、言うまでもなく「愛す可き」で、「かわいい」(この本来の語は「かわゆい」)の意味として、『日本国語大辞典』が提示する語義は「①きまりがわるい。はずかし。②(物をまともに見て居られない意からあわれで、人の同情をさそうようなさまである。かわいそうだ。ふびんだ。気の毒だ。いじらしい。③(女子。こどもなど)愛らしい。愛らしく感じられる。また甘えの気持ちをこめて愛人などをいとしと思うさまにいう。かわいい。④小さくて、やさしく扱ってやりたい気持ちを起こさせるさまである。好ましく小さい。かわいらしい。」である。

その広がりもさることながら、今時語としては、③④などがその主なるものかとも思うが、その根底にあるのは、言わば傲慢であろう。源氏の病・かわいいという「己、小さく弱い我が身、可愛そうな己の立ち位

置とか、を棚に上げ、(同位相にあるものの恨み・憎しみが一番強烈だという認識もある)上目線で……。「かわいい……」などと奇声を発する。もうとても目にしたくない無様な光景ではなからうか。自撮りなんでもつてのほかだ。

今、コロナ禍の最中で、とても例年と同様には語れない国難に見舞われている状況。だから、私の今も、特殊なのだと思うが、ともかく、可愛そうではある。誰とも同じなのだろうが、それが分断されて孤立孤立、今一番欲しいのは、「語らい」か。ネットでの飲み会などもあるようで、それも楽しいかもしれないが、これは不得手、器械音痴がかわいそう。でも、「かわいそう」なんて言わないで、完成間近の源喜庵は、着々と形を整え、皆さんの来訪をお待ちしてますので。

駄文を弄しましたが、今春をもちまして任期満了で目出度く、ご卒業をとりました。「源喜庵」は、東京都町田市に構えた・阿部源氏研究室・兼・飲み場の呼称です。町田市役所裏の森野二丁目。ニユウ森野ハイツ103号室のことでした。

「元国文学科教員」



高ゼミ

(高 榮蘭先生担当)

火曜5限



— 2019 年秋 文学散歩・鎌倉 —

◆高ゼミでは、毎週二人ずつテーマごとに沿った卒業論文を発表しながら、授業を進めています。三年生は、まず、四年生が卒業論文で取り扱う近現代小説を読み込み、自分ならではのテーマを設定して書

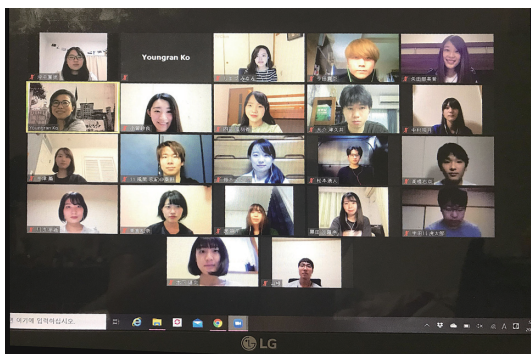
くだろうか、という事を考える「読書マラソン」に取り組みます。ここでの意見は、三年生には分析を行う上での最初の訓練となり、四年生にとっても新しい発見となることも多いので、論文を進める上で良い手助けにもなっています。今年は、梶井基次郎、谷崎潤一郎、大江健三郎、小川洋子、吉本ばなな、川上弘美、伊藤計劃の小説について議論していく予定です。

昨年度は、軽井沢や山中湖で行ってきた夏合宿ではなく、鎌倉への文学散歩を選びました。ゼミ内で話し合い、近現代文学ゆかりの地や文学館巡りをしました。また、お昼は鎌倉名物のしらす丼を堪能しました。新型コロナウイルスの影響で卒論発表会や追いコンも中止になりました。これまでと同じような企画が続けられるかどうか分からない状況です。[ゼミ幹事4年 今津薫]

◆前期は新型コロナウイルスの影響を受け、高ゼミもオンライン授業となりました。誰もが初めての試みということで、開始前は様々な不安がありました。しかしいざ始まってみると、ブラックボードの活用により発表者の資料を事前に確認してコメントを付けられたり、Zoomを使用することで少数での意見交換も活発に行えるようになった

たりと、オンライン授業の強みを生かした展開となり、以前にもましてゼミ生の参画度も向上したように思います。新しい環境にも恐れず適応すれば、また違う景色が見えるという素敵な経験をさせて頂きました。今年度はかなり特殊な状況下における授業となりますが、残りの時間もゼミ生の皆さんと一緒に考え、意見し合い、充実した学習の場に行けるよう努力していきたいと思っています。

「高ゼミ出身TA 木下陽向」



— 2020 年 5 月 26 日 オンライン授業 —

1964年(昭和39年)

1月 1日	カルビー「かっぱえびせん」発売
2月 5日	日本でビートルズ「抱きしめたい」発売
3月15日	『語文』第十七輯刊行
4月 1日	岡野道夫氏が国文学科助手に就任
4月 1日	文学研究科に独文学専攻を設置
4月 1日	海外旅行自由化
4月 6日	「ひょっこりひょうたん島」放映開始
4月28日	『平凡パンチ』創刊
5月27日	インドのネール首相死去
6月 4日	高木市之助博士が本学最終講義
6月15日	『語文』第十八輯刊行
6月16日	新潟地震で死者26人不明者11人
6月28日	日本大学国文学会総会開催
9月17日	東京モノレール開業
9月23日	王貞治選手シーズン55本塁打新記録
10月 1日	東海道新幹線開業
10月10日	東京オリンピック開幕
10月14日	ソ連フルシチョフ首相解任
10月16日	中国初の核実験に成功
10月25日	『語文』第十九輯刊行
11月 3日	学術研究発表会開催
11月 7日	上代文学会事務局が国文学研究室に移転
11月 9日	池田内閣総辞職、佐藤内閣成立
11月26日	学術研究発表会開催



同アングルからのカラー写真 『朝日新聞』10月10日付号外

日本選手団 堂々の入場行進



国文学科ヒストリー ⑬

【国内外の動き】この年、海外での大きな出来事もなく、世界の衆目は日本へ注がれた。10月10日午後2時、アジア初となる第18回国際オリンピック大会が東京で開催。観衆7万5千人が見まもる千駄ヶ谷の国立競技場では、オリンピック選手や役員による史上最大規模の入場行進が開始された。朝日新聞号外は「赤の上着、白ズボン」のユニホームも鮮やかに堂々と入場行進をする日本選手団」を大判写真で伝えた。そして、抜けるような秋空の下、テレビ中継が東京オリンピック開幕の様子を全世界へ流した。一方、オリンピック開幕9日前の10月1日、悲願であった東海道新幹線が開業した。この開業により日本の大量・高速輸送時代の幕が開いた。菓子類ではおなじみの「かっぱえびせん」が発売。雑誌では『平凡パンチ』が創刊され、趣向の豊かさを享受する時代へと突入した。

【学内外の動き】6月に高木市之助博士の本学最終講義が「国文学の新しい構造」特にマスコミに乗りつつ」と題して開催された。同月には日本大学国文学会が開催され、①万葉集巻九における問題一つについて、小坂悠紀子、②千載和歌集の研究(五)賀部恋一恋二・村野義孝/千葉幸子/稲辺純一、③夕顔の死の典拠について・常磐井和子、④万葉集巻第十一・十二について・中川幸廣、⑤「四季」成立の周辺・塩敬、⑥明治三十年代における「文学界」の意義・窪川鶴次郎らによる研究発表の後、五味智英氏による「人麻呂と家持」と題する講演が行われた。

「ひかり号」の出発式



研究室訪問 一問一答



竹下義人(近世文学専攻)研究室

- ①お風呂には左右どちらの足から先に入りますか。
右足からのようです。それが何か？
- ②おすすめの本を一冊あげてください。
私的 SF ベストワンは、スタニスワフ・レム(沼野充義訳)『ソラリス』(早川文庫 2015)。
- ③締め切りという言葉に何を思いますか。
守ってくれない学生の姿が浮上し、殺意が込み上げてきます。
- ④犬と猫、どちらが好きですか。
犬です。柴犬以外は犬と認めていません。
- ⑤幼少の頃、大きくなったら何にになりたい？
相鉄(相模鉄道)バスの運転手。

掲 示 板

研究室短信

昨年度をもって中古文学専攻の阿部好臣先生と書学専攻の鈴木晴彦先生のお二人が定年退職された。この4月から、中古文学専攻の袴田光康先生をお迎えした。

残念ながら、鈴木晴彦先生のご退職にとともに、国文学科の専攻分野から「書学」がなくなった（教職コースとは無関係）。ただし、今年度の書学分野の卒論指導とゼミについては引き続き鈴木先生が担当されている。書学ゼミが開設されたのはゼミ制度のスタートした2002年のことになるが、現在の鈴木ゼミ所属の4年生8名が、書学ゼミとしては最後の卒業生となる。

阿部好臣先生最終講義



先にお知らせした通り、退職された阿部先生

同窓会員募集のご案内（郵便振替口座 00180-3-11183 日本大学国文学会）

国文学会では国文学科の卒業生（大学院・通信教育部を含む）を対象に同窓会員を募集中です。学会行事へ参加していただけるほか、機関誌『国文通信』を年2回お届けします。会費は郵便振替にて1,000円（2年分）から。振込用紙に卒業年次と「同窓会員入会」と明記してご送金くださいれば手続き完了です。国文学科サイトにも詳しい案内記事を掲載しています。

生の最終講義が2月15日（土）15時から2時間にわたって開講された。場所は3号館3203教室。講義題目は『源氏物語』の影を巡って」。在学生をはじめ多くの卒業生や関係者が先生の最終講義に耳を傾けた。夕刻からは学内のコスモスで懇親会も開かれた。

国文学科短信

新カリキュラムがスタートした年度であるが、新型コロナウイルス感染症流行の影響で、3月以降はとんでもないことになった。

前号で卒業パーティーが久しぶりに開かれる予定、など書いたが、パーティーはおろか卒業式もなかった。密閉・密集・密接を避けるための策として、ゼミごとに時間を区切って担当教員が一人一人に学位記を手渡すという方式をとった。これが学科としてできた精一杯の卒業行事である。その後のゼミ活動は一切不可で、十分なお別れの機会・時間が持てなかったことが悔やまれる。その後の卒業生たちの多くは、4月になっても満足に出勤できず、一部の職種を除けば、いきなり在宅ワークを余儀なくされているという。

新1年生も同様。入学式も開講式もないまま、つまりクラスの仲間と一度も顔を合わせることなく遠隔授業に突入してしまった。

編集後記

本誌では皆様からの投稿を随時受け付けています。エッセイのほか、同窓会の案内や報告なども歓迎します。詳細は本誌編集委員会宛、お問い合わせください。

電子メールは国文学科サイト内に設置してある「お問い合わせ」フォームから送信できます。感想などもお寄せください。

◆コロナ禍で、編集作業も停滞しがちだったが、執筆者の皆様からのご助力を得て、今号も無事に発行できた。

◆創刊号以来、編集に携わってこられた鈴木晴彦先生が定年を迎えられた。連載「国文学科ヒストリー」は、記事の執筆からレイアウトまですべて単独で担当され、今号も含め、「キャンパス点描」の掲載写真も先生の作品である。校正にも厳格にあたられ、今日まで同窓会誌として発行が維持できているのも先生のご尽力の賜物である。◆今号から新たに鈴木功真先生が編集委員に加わった。（義）

国文通信編集委員会

紅野謙介・鈴木功真・竹下義人

第13号

2020年
6月25日発行

日本大学文学部国文学科
国文通信編集委員会
〒156-8550
東京都世田谷区桜上水3・25・40